

『AIの遺電子』に学ぶ未来構想術：2 貴方の考える未来社会像

1 個性とその複製に関する一考察



倉本 到 | 福知山公立大学

——同じ顔 同じ声
鏡では映せない 後付けの思い出 a posteriori と
私だけの時間
(くちばし P 「私の時間 (鏡音リン Ver.)」)

「こんばんわ、ディー」
「こんばんわ、どうしたの、こんな夜中に？」
「今ぐらいいしか話す機会がないかな、と思って。
……久し振りだね」
「うん」
「わたしの部屋も、この本棚も久し振り……なにか
増えてる？」
「ここ2年分の続刊と、面白そうな作家さんを3冊
分ぐらい発掘したよ」
「わあ、楽しみ。あとで読もう」
「わたしの机の上に置いとく」
「ほかに変わったこと、あった？」
「……うん、いろいろ」
「2年だもんなあ」
「でも、『帰還は絶望的』って言われてたことを思う
と、2年なんて大したことないと思うよ。……まあ
パパはちょっと老けちゃったけどね」
「パパなら、再会したとき開口一番に言ってたよ、『う
ちの娘はこんなガサツじゃねえ』って」
「あはは」
「とはいえ2年は長かったなあ……狭い狭い閉鎖空
間で、なんの代わり映えもない生活。新しい服も音
楽も、おいしい食事何ものなし。できることといえ
ば、ほとんど動かない星空を眺めるか、いつも不機
嫌そうな誰かの顔を眺めるか、それだけだったよ」

「『火星衛星軌道上に飛来した未観測の流星塵』、だっ
け？」

「そう、本当のことを言えば観測はされていたんだ
けど、粒子が小さいからって無視してた。でも通り
過ぎたときにはもう後の祭りだね……宇宙空間って
普通音がしないんだけど、そのときはすごい音だっ
たよ」

「へえ……」
「生命維持系はEVAで^{船外活動}すぐに修復できる算段がつ
いたけど、主推力は性能が5割低下。何より辛かつ
たのは、通信系がバックアップアンテナも含めてほ
ぼ崩壊したことよね……唯一の通信手段が宇宙服と
のバイタルサインを送受信するために用意されてい
た低出力^{ローゲイン}アンテナだけって、まるで小説」

「でもそのおかげで、家族も友達も、わたしたちが
生きていることが分かって、わたしの帰還を待つこ
とができたもの」

「地球への帰還経路に乘せるまではいろいろ大変
だったよ……まあ主にイライラすることばかりだっ
たけどね」

「そうなの？」

「あんまり思い出したくない……人間ってやっぱり
駄目ね……」

「そんなことない。わたしは人間だからここに戻っ
てこれたんだと思う。ずっとわたしと話をしてきた
から、分かるよ。わたしの気持ち」

「……うん、そうかもね。……じゃあ、あらためて
2年間、パパやママを見ていてくれて、本当にあり
がとう」

「改まってそういうことを言う柄でもないでしょ」

「あははは」

「それに、それが私の存在意義だもの。でも……この2年間は、わたしのことがまったく分からなくて……」

「探査船の中に大量に埋め込まれていた活動記録センサーが拾った行動ログと、寝る前の振り返りトークでやってきた貴女の対話、突然止まったものね」

「うん」

「わたし、貴女と話をするの、好きだったんだよ。ほら、クルーはもちろん気のいいやつばかりだけど、腹を割って話せる女性の友達はいなかったから。わたしと貴女とがお互いに、今日1日何があったかをゆっくり振り返るあの時間を、とても大事にしていた」

「……まだ、その髪型なんだ」

「わたしが……好きだったから。わたしは髪を伸ばしてるの？」

「もうその髪型はやめた……今にして思えば、些細なボタンの掛け違いなんだけだね」

「何があったの？」

「事故直後のトラブルでね。……あいつ、びっくりするほど意気地なしだった……。極限状態だから仕方ないのかもしれないけど、あいつ、最初のうちは本当に何もせずにふさぎ込んでるばかりでね。もう駄目だとか、こんなことしても無駄だとか。わたし、『今それを言って何になるの』って何度も怒鳴っちゃった」

「……わたしらしくないね」

「そう……かもね。あんまり決断的にものを言うタイプじゃなかったかな……でもそれは優柔不断だったからじゃなくて、わたしが決定を下す必要がないぐらいみんな優秀だったからだもの。でも、状況が変わりすぎた。わたしも変わらざるを得なかったのよ。あいつがそうだったみたいで。だからもう、あいつが好きな髪形にするのは、無理かな……」

「わたしは……」

「びっくりしたよ」

「？」

「話をしたの、太一^{たいち}のディーと。なんていうか……2年たったのに、2年前のあいつのままだった……ずっと一緒にいた本当のあいつも存在するのに、懐かしくて、なんだか切なくて。本当のあいつに久しぶりに会ったみたいで、あいつが彼ならよかったのに、って。変だよ、彼はそもそもあいつなのに」

「……」
「彼、貴女とだけじゃなくて、パパやママとも仲良くしてたんでしょ？ 貴女、時々そんな話をしてくれたじゃない」

「うん……まあ、ちょくちょく遊びに来てたから」

「分かるよ……分かる。貴女の顔、あいつの……彼の話するときはずっと本当に幸せそうだったもの。ほら、細かいところに気の回る、そのくせ気の利かないつまらないギャグとかを言いながら、なんでも支えてくれるあいつだから、わたしはあいつに惹かれてたの。もしかすると、気持ちの半分は『あいつみたいになりたい』と憧れてたのかもだけど」

「つまらないギャグ、はちょっとひどいかな」

「何？ 最近は面白くなったの？」

「全然」

「まあ無理よね、あはは」

「……」

「ねえ」

「何？」

「貴女、彼のこと、好きなんでしょう？」

「その……でも、わたしはあいつとはもうそんな関係じゃないから……」

「やめて」

「えっ？」

「2年も離れていたのよ。最初はどうあれ、貴女はわたしじゃない。あいつが彼でないように。パパがわたしにそう言ったように。ねえ、わたしは、貴女の気持ちを聞いているの」

「わたしは……私は……」

「わたしはね、貴女にいてほしいの。いつもわたし

の気持ちを聞いてくれて、わたしのことをだれよりもよく知っている、わたしのための貴女。でも、今わたしに必要なのは、わたしではない。ほかの誰でもない。貴女なの。その貴女の気持ちを、わたしのために否定しないで」

「でもあいつが好きなのはわたしだから……私じゃなくて……」

「違うわ。彼はわたしではなくて、貴女といたのよ。彼の気持ちがずっと続いているとしたら、それはわたしではなくて、貴女がそうになってほしい、と考えたから。そうでしょう？」

「……」

「もう貴女は、わたしでなくていいの。わたしのために、せっかく築き上げた2年間の貴女を壊さなくていい……どうしたの？」

「……ありがとう、わたし……」

「嬉しそうな顔じゃないわ」

「……ううん、本当にうれしいよ、わた……あなたの気持ち……。でも、ごめんなさい、ほんの少し、間に合わなかった……」

「どうということ？ 間に合わないって、何に？ どうして泣いているの！？ わたしは貴女を全力で守るわ！ 貴女のことをただの代役だなんて、絶対に……」

「ニュース……」

「……えっ？」

『……ただ今入りましたニュースです。』

先ごろ有人火星探査機の事故から奇跡の帰還を果たした火星探査クルーのひとり、天文学者の八千代^{やちよ}太一^{たいいち} 34歳が、独立行政法人^{アンドロイド} 機人創成研究機構から特別に貸与されていた、惑星探査などの長期にわたる不在時における不在者の行動を代替する機人^{デュプロイド}「Duploid」を破壊した上、自宅に火をつけたとして、先ほど神奈川県警に放火と器物損壊の疑いで逮捕されました。なおこの火災で八千代の両親らが軽い火傷を負いました。

調べに対し八千代は「あいつが私の幸福を奪い取った」「自分の人生は偽物だ」などと訳の分からないことを口走っており、警察は動機を調査するとともに、八千代の精神鑑定を実施して状況を詳しく検証するということです。……』

(2019年9月29日受付)

■倉本 到(正会員) kuramoto-itaru@fukuchiyama.ac.jp

2019年より福知山公立大学教授。HAI/HRI およびエンタテインメントコンピューティングの研究に従事。好きなSF作品はS.レム『砂漠の惑星』他多数。

